

計算情報学Ⅰ

名古屋大学 情報文化学部
自然情報学科 3年
第12回

鈴木泰博

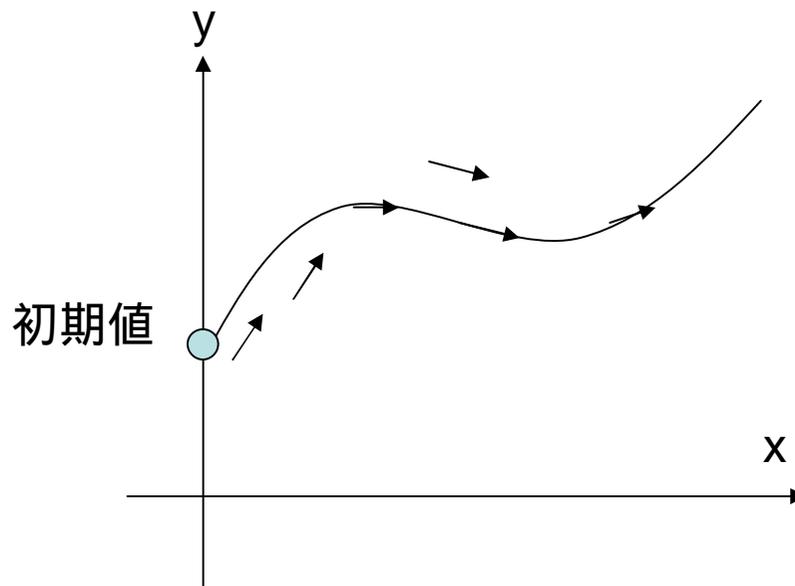
情報文化学部・大学院情報科学研究科
複雑系科学専攻

Agenda

計算情報学 I 第12回

微分方程式の数値解法 その2

微分方程式の数値解法 初期値問題

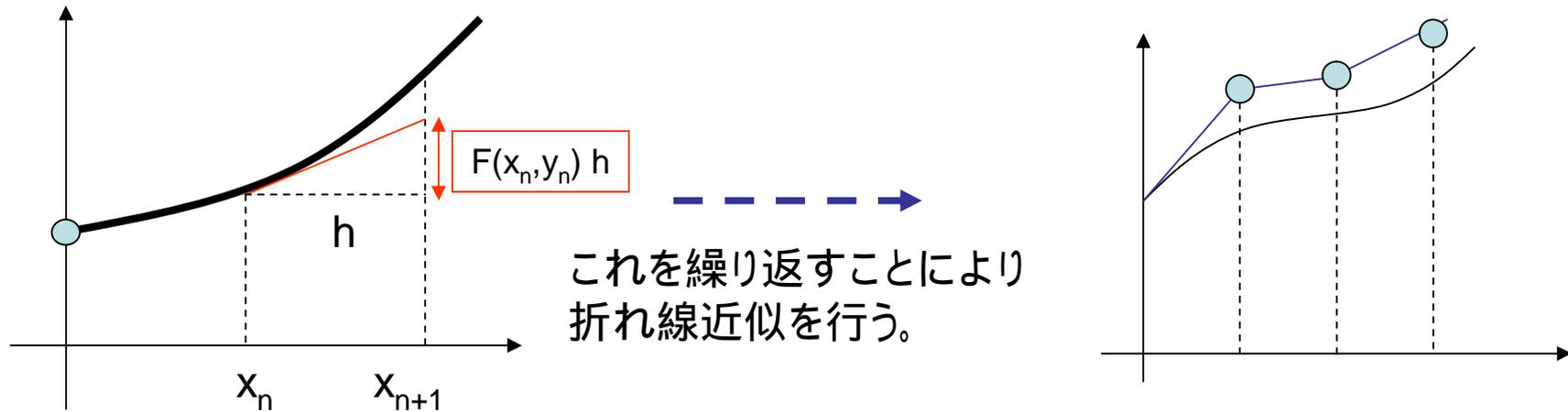


$$\frac{dx}{dy} = f(x, y)$$

とは、 x, y の各々の点での傾きが
 $f(x, y)$ の値を持つ方程式を表している。

こうした解曲線は一般には無数に存在するが、初期値を与えることによりそこからの値をたどること一意に決めることができる。

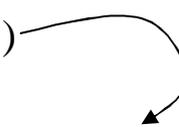
微分方程式の数値解法 ～オイラー法



$$\frac{f(x_n + h) - f(x_n)}{h} \cong f'(x_n)$$

演習：上式を $f(x_n+h)$ について解け。ただし、 $f'(x)=F(x,y)$ とする。

オイラー法の基本式

$$\frac{f(x_n + h) - f(x_n)}{h} \cong f'(x_n)$$


$$y' = y(x + h) \cong y(x) + hF(x, y) \dots \Leftarrow y'$$
$$y(x_0) = a$$

オイラー法の基本式

演習: 以下の微分方程式に対するオイラー法の基本式を求めよ。

$$2y' + 3y = x$$

$$y' - xy = 0$$

オイラー法の基本式

演習: 以下のオイラー法の基本式について最初の数項のみ計算せよ。

$$y' = y(x+h) = y(x) + h(x - 3y(x)) / 2$$

ただし、 $y(0) = 1$, $h = 0.1$ とする。

$$y' = y(x+h) = y(x) + hxy(x)$$

ただし、 $y(1) = 1$, $h = 0.01$ とする。

$$y(x+h) = y(x) + h(x - 3y(x)) / 2$$
$$y(0) = 1, h = 0.1$$

$$y(0 + 0.1) = y(0) + 0.1(0 - 3y(0)) / 2$$
$$= 1 + 0.1(0 - 3 \times 1) / 2 = 0.85$$

$$y(0.1 + 0.1) = y(0.1) + 0.1(0.1 - 3y(0.1)) / 2$$
$$= 0.85 + 0.1(0.1 - 3 \times 0.85) / 2$$
$$= 0.7275$$

$$y(x+h) = y(x) + hxy(x)$$
$$y(1) = 1, h = 0.01$$

$$y(1 + 0.01) = y(1) + 0.01 \times 1 \times y(1)$$
$$= 1 + 0.01 \times 1 \times 1 = 1.01$$

$$y(1.01 + 0.01) = y(1.01) + 0.01 \times 1.01 \times y(1.01)$$
$$= 1.01 + 0.01 \times 1.01 \times 1.01 = 1.020201$$

オイラー法 another view

微分方程式の初期値問題は、

の形で書ける。数値計算での解は厳密解が得られないので近似解を得ることを考える。そこで考える区間を等分割し、 $x_0=a, x_n=a+nh, n=1,2,\dots,N$ とする。
$$\begin{cases} y' = f(x, y) \\ y(a) = y_0 \end{cases}$$

$y(x)$ を $x=x_0$ の近傍でテイラー展開すると

$$y(x) = y(x_0) + (x - x_0)y'(x_0) + \frac{1}{2}(x - x_0)^2 y''(\xi_0)$$

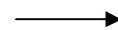
$y(x_0) = y_0 = Y_0, y'(x_0) = f(x_0, y_0)$ 2乗の項を無視して $x = x_0 + h = x_1$
 $y(x_1)$ の近似値を $Y_1, y(x_1)$ とすると、

$$Y_1 = Y_0 + hf(x_0, y_0)$$

同様に $Y_2 = Y_1 + hf(x_1, Y_1)$

$$Y_3 = Y_2 + hf(x_2, Y_2)$$

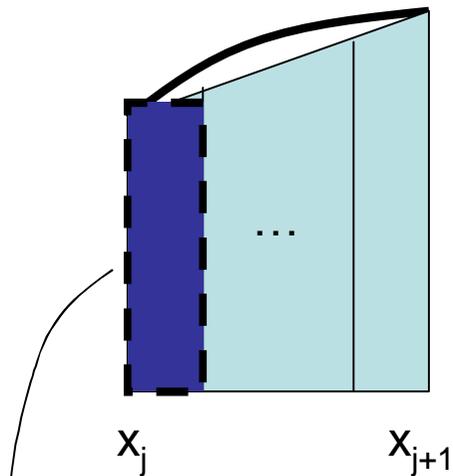
.....



$$\begin{cases} Y_0 = y_0 \\ Y_{n+1} = Y_n + hf(x_n, y_n), n = 0, 1, 2, \dots, N-1 \end{cases}$$

オイラー法とはテイラー展開を第1項で打ち切って近似解を求める方法

オイラー法 another view



$$y(x_{n+1}) - y(x_n) = \int_{x_n}^{x_{n+1}} f(x, y(x)) dx$$

この面積を $hf(x_j, y_j)$ で近似

オイラー法のまとめ

$$\frac{y_{n+1} - y_n}{h} = f(x_n, y_n)$$

$y' = f(x, y)$ の左辺を差分で置き換えたもの。

$$y(x) = y(x_0) + (x - x_0)y'(x_0) + \frac{1}{2}(x - x_0)^2 y''(\xi_0)$$

テイラー展開を第1項で打ち切ったもの

$$y(x_{n+1}) - y(x_n) = \int_{x_n}^{x_{n+1}} f(x, y(x)) dx$$

積分を $hf(x, y)$ で置き換えたもの

簡便な方法ではあるが、精度はあまりよくない。

例) $y' = 2xy$

ルンゲ-クッタ法

- 精度を上げる方法はいろいろあるが、本方法では直前の Y_n の値のみを用いて、オイラー法のごとく計算できる(1段階法)
- オイラー法に比べてずっと精度がよい
- 微分方程式の数値解法における標準手法

ルンゲ-クッタ法

$$k_1 = f(x_i, y_i)$$

$$k_2 = f\left(x_i + \frac{h}{2}, y_i + \frac{k_1}{2}\right)$$

$$k_3 = f\left(x_i + \frac{h}{2}, y_i + \frac{k_2}{2}\right)$$

$$k_4 = f(x_i + h, y_i + hk_3)$$

$$y(x_{i+1}) = \frac{h}{6}(k_1 + 2k_2 + 2k_3 + k_4)$$

覚えていますか？

ルンゲクッタ法の幾何学的意味は？

ルンゲクッタ法 another view

$y'(x) = a(x - x_i)^2 + b(x - x_i) + c$ が $x_i, x_i + h/2, x_i + h$ を通ることより、

$$\begin{pmatrix} 0 & 0 & 1 \\ \left(\frac{h}{2}\right)^2 & \frac{h}{2} & 1 \\ h^2 & h & 1 \end{pmatrix} \begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} y'(x_i) \\ y'(x_i + \frac{h}{2}) \\ y'(x_i + h) \end{pmatrix}$$

左から逆行列をかけ、 $(a, b, c)^t$ を求めると、

$$\begin{pmatrix} a \\ b \\ c \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} \frac{2}{h^2} y'(x_i) - \frac{4}{h^2} y'(x_i + \frac{h}{2}) + \frac{2}{h^2} y'(x_i + h) \\ -\frac{3}{h} y'(x_i) + \frac{4}{h} y'(x_i + \frac{h}{2}) - \frac{1}{h} y'(x_i + h) \\ y'(x_i) \end{pmatrix}$$

これを元の2次補間の方程式に代入して整理すると、

$$y(x_i + h) = \frac{h}{6} (y(x_i, y(x_i)) + 4y(x_i + \frac{h}{2}, y(x_i + \frac{h}{2})) + y(x_i + h, y(x_i + h)))$$

演習

$y'-2xy=0$ をルンゲクッタ法により計算せよ。
ただし、 $x=0$ のとき $y(0)=1$, $h=0.1$ とする。

$$\begin{aligned}k_1 &= f(x_i, y_i) \\k_2 &= f\left(x_i + \frac{h}{2}, y_i + \frac{h}{2}k_1\right) \\k_3 &= f\left(x_i + \frac{h}{2}, y_i + \frac{h}{2}k_2\right) \\k_4 &= f(x_i + h, y_i + hk_3) \\y(x_{i+1}) &= \frac{h}{6}(k_1 + 2k_2 + 2k_3 + k_4)\end{aligned}$$

演習

$$\begin{aligned}k_1 &= f(x_i, y_i) \\k_2 &= f\left(x_i + \frac{h}{2}, y_i + \frac{h}{2}k_1\right) \\k_3 &= f\left(x_i + \frac{h}{2}, y_i + \frac{h}{2}k_2\right) \\k_4 &= f(x_i + h, y_i + hk_3) \\y(x_{i+1}) &= \frac{h}{6}(k_1 + 2k_2 + 2k_3 + k_4)\end{aligned}$$

$y' - 2xy = 0$ をルンゲクッタ法により計算せよ。
ただし、 $x=0$ のとき $y(0)=1$ とする。

$$f(x, y) = f(x_0, y_0) = 2x_0y_0 = 2 \times 0 \times 1 = 0 \dots k_1$$

$$\begin{aligned}f(x_0 + h/2, y_0 + hk_1/2) &= 2(x_0 + 0.1/2)(y_0 + k_1/2) \\&= 2(0 + 0.05)(1 + 0.1/2 \times 0) \\&= 0.1 \dots k_2\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}f(x_0 + h/2, y_0 + hk_2/2) &= 2(x_0 + 0.1/2)(y_0 + 0.1/2 \times 0.1) \\&= 2 \times 0.05 \times (1 + 0.005) \\&= 0.1005 \dots k_3\end{aligned}$$

$$\begin{aligned}f(x_0 + h, y_0 + hk_3) &= 2(x_0 + 0.1)(y_0 + 0.1 \times 0.1005) \\&= 2 \times 0.1 \times (1 + 0.10005) \\&= 0.2021 \dots k_4\end{aligned}$$

$$y_1 = (k_1 + 2k_2 + 2k_3 + k_4) / 6 = 1.040811$$

1段階法の誤差の評価

誤差の評価

一段階法の微分方程式の数値解法を大雑把に見積もってみる。

$y(x)$: 微分解
 $Y(x)$: 差分解

差分による x_i の時点から x_{i+1} の増分予測

$$|y(x_{i+1}) - Y(x_i + h)| = |y(x_{i+1}) - y(x_i) - \Delta t F(x_i, y(x_i))|$$

微分解での x_{i+1} と x_i の実際の差

より

$$\delta = \left| \frac{y(x_{i+1}) - y(x_i)}{\Delta t} - F(x_i, y(x_i)) \right|$$

誤差の評価

$y(x)$: 微分解
 $Y(x)$: 差分解

$$\delta = \left| \frac{y(x_{i+1}) - y(x_i)}{\Delta t} - F(x_i, y(x_i)) \right|$$

演習: オイラー法の誤差評価を行え

Hint, テイラーの公式より $y(x_{i+1}) = y(x_i) + \Delta t y'(x_i) + O((\Delta t)^2)$

誤差の評価

$y(x)$: 微分解
 $Y(x)$: 差分解

$$\delta = \left| \frac{y(x_{i+1}) - y(x_i)}{\Delta t} - F(x_i, y(x_i)) \right|$$

演習: オイラー法の誤差評価を行え

Hint, テイラーの公式より $y(x_{i+1}) = y(x_i) + \Delta t y'(x_i) + O((\Delta t)^2)$

$$\frac{y(x_{i+1}) - y(x_i)}{\Delta t} - f(x_i, y(x_i)) = y'(x_i) - f(x_i, y(x_i)) + O(\Delta t) \approx O(\Delta t)$$

つまり、理論的には Δt が小さければ小さいほど精度はよくなる。
だが、実際は Δt が小さくなると桁落ちなどが生ずる可能性があるため、注意が必要

誤差が t(1次)とは？

テイラーの公式より $y(x_{i+1}) = y(x_i) + ty'(x_i) + O((x)^2)$

-) オイラー法のスキームより $Y(x_{i+1}) = Y(x_i) + ty'(x_i)$

1ステップでの誤差は $O((x)^2)$ ← $|y(x_{i+1}) - Y(x_{i+1})| = O((x)^2)$

計算する範囲を a から b として、区間を m に等分割したとすると、 $x = (b - a)/m$

したがって、 $x^2 = x(b - a)/m$ 。各々の区間で誤差が m 回蓄積すると x の m 倍程度、 $x(b - a)/m \times m = x(b - a) = O(x)$ の誤差となる。

計算は煩雑になるが (2変数のテイラー展開)、同様の議論を行うとルンゲクッタの誤差は $O(x^4)$ となる。

高階微分方程式の場合

例えば、2階微分方程式の場合 $U'' + U = 0, U(0)=0, U'(0)=1$

別の関数を“かまして”1階微分方程式に帰着させる。

$$v = u' \quad \text{とすると} \quad U'' = (U')' = v'$$

$$\begin{cases} u' = v & u(0) = 0 \\ v' = -u & v(0) = 1 \end{cases}$$

演習： $U''' + U = 0$ の場合はどうなるか？

演習: $U''' + U = 0$ の場合はどうなるか?

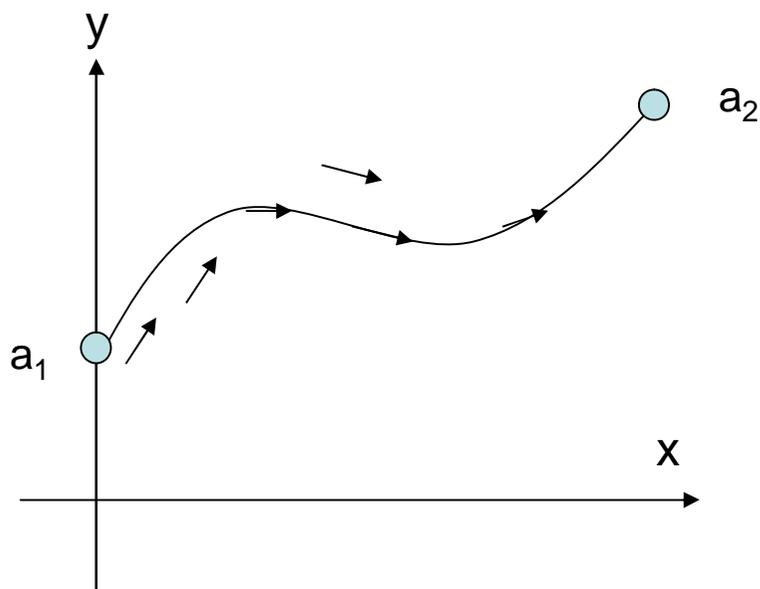
$$V' = W$$

$$\left(\overline{\overline{\overline{(U')}}'} \right)' = -U$$

$$U' = V$$

$$\begin{cases} u' = v \\ v' = w \\ w' = -u \end{cases}$$

2階常微分方程式の境界値問題



$$\begin{cases} y'' = p(x)y' + q(x)y + r(x) \\ y(0) = a_1, y(1) = a_2 \end{cases}$$

初期値問題と異なり、境界条件があらかじめ与えられている場合は、初期値問題とおき方が大幅に異なる。

差分方程式による近似

演習

$y(x + h)$ を第3項までテイラー展開せよ。

$y(x - h)$ を第3項までテイラー展開せよ。

、 より $y'(x)$ について解け

、 より $y''(x)$ について解け

差分方程式による近似

演習

$y(x + h)$ を第3項までテイラー展開せよ。

$$y(x + h) = y(x) + hy'(x) + \frac{h^2}{2!} y''(x) + O((\Delta x)^2)$$

$y(x - h)$ を第3項までテイラー展開せよ。

$$y(x - h) = y(x) - hy'(x) + \frac{h^2}{2!} y''(x) + O((\Delta x)^2)$$

、 より $y'(x)$ について解け... -

$$\frac{f(x + h) - f(x - h)}{2h} = y'(x)$$

、 より $y''(x)$ について解け... +

$$\frac{f(x + h) - 2y(x) + f(x - h)}{h^2} = y''(x)$$

常微分方程式の境界値問題

$$\frac{f(x+h) - 2f(x) + f(x-h)}{h^2} = y''(x)$$

$$\frac{f(x+h) - f(x-h)}{2h} = y'(x)$$

$$\begin{cases} y'' = p(x)y' + q(x)y + r(x) \\ y(0) = a_1, y(1) = a_2 \end{cases}$$

$$\frac{f(x_j+h) - 2f(x_j) + f(x_j-h)}{h^2} = p_j \frac{f(x_j+h) - f(x_j-h)}{2h} + q_j y(x_j) + r_j$$

$$-\left(1 - \frac{h}{2} p_j\right) y_{j-1} + (2 + h^2 q_j) y_j - \left(1 - \frac{h}{2} p_j\right) y_{j+1} = -h^2 r_j$$

j
 j
 j
 d_j

境界値問題

以上を整理すると

$$\begin{array}{rcccccc} \alpha_1 y_1 & + \gamma_1 y_2 & & & & = & d_1 - \beta_1 y_0 \\ \beta_2 y_1 & + \alpha_2 y_2 & + \gamma_2 y_3 & & & = & d_2 \\ & \beta_3 y_2 & + \alpha_3 y_3 & + \gamma_3 y_4 & & = & d_3 \\ & & \vdots & \vdots & \vdots & & \vdots \\ & & & \beta_{N-1} y_{N-1} & + \alpha_{N-1} y_{N-1} & = & d_{N-1} - \gamma_{N-1} y_N \end{array}$$

最終的には以下の連立方程式に帰着される。

$$\begin{pmatrix} \alpha_1 & \gamma_1 & & & & & \\ \beta_2 & \alpha_2 & \gamma_2 & & & & \\ & \beta_3 & \alpha_3 & \gamma_3 & & & \\ & & \ddots & \ddots & \ddots & & \\ & & & \beta_{N-2} & \alpha_{N-2} & \gamma_{N-2} & \\ & & & & \beta_{N-1} & \alpha_{N-1} & \end{pmatrix} \begin{pmatrix} y_1 \\ y_2 \\ y_3 \\ \vdots \\ y_{N-2} \\ y_{N-1} \end{pmatrix} = \begin{pmatrix} d_1 - \beta_1 y_0 \\ d_2 \\ d_3 \\ \vdots \\ d_{N-2} \\ d_{N-1} \end{pmatrix}$$

あとは、ガウスの消去法などで連立方程式を解けばよい。
境界条件を様々に変える場合はLU分解をしておくとな計算が楽